

●書学書道史学会

会 報

第 45 号

令和5年(2023)5月15日発行

編集・発行

書学書道史学会

広 報 局

〒100-0003

東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル 7F

(株) 毎日学術フォーラム内

TEL (03)6267-4550

FAX (03)6267-4555

MAIL maf-syogaku@mynavi.jp

『書学書道史研究』の更なる充実に向けて

萱 のり子

例年より早い桜の開花とともに、長かったコロナ禍の自粛生活が緩和され始めています。学会の活動では2022年4月に第17期の新体制が発足し、一年余りが経ちました。編集局は、菅野智明前局長より業務を引き継ぎ、目下『書学書道史研究』の編集に尽力しているところです。

編集局は、新旧体制において呼称自体に変わりはありませんが、前期までは「学会誌、機関紙誌その他の編集に関する業務」とその対象が広がったのに対し、今期からは「学会誌の編集に関する業務」と専一化されました。そのため第17期編集局(萱のり子・下田章平・永由徳夫・井田明宏・正岡知晃)では、これまで培われてきた土台の上に、学会誌を更に充実させていくことが責務となっています。2022年度においては、『書学書道史研究』第32号の編集と並行して、研究誌充実のために課題となる事柄を検討すべく取り組んでまいりました。

その一つに、「投稿規定」「執筆要領」に関する検討があります。近年の動向を見ていると、中堅・若手研究者による論文の投稿が増えてきており、論考のテーマや観点も多様になってきています。このことは書学書道史研究の進展につながる喜ばしい状況です。しかし一方では、掲載される論文の水準を保持・向上させていくための方策を講じることや、多様な分野にわたる査読者を確保すること等が早々に求められてきています。

そこで編集局では、査読を公正に行い、投稿論文の質的向上をはかっていくという包括的な目的を確認したうえで、『書学書道史研究』投稿規定・執筆要領・査読規定の改定への第一歩として、他学会の事例を広く調査して編集局原案をまとめました。その後2022年10月29日、盛岡大会同日に開かれた第3回理事会で発議し、以後、審議を重ねてきています。

すでに議論が進んでいるのは、論文とは異なる性格をもつ原稿の取り扱い、投稿時の原稿チェックリスト作成等についてです。たとえば、「論文」は「独創性のある実証的・理論的研究の成果報告など」、「研究ノート」は「独創的で学術的価値を有する資料紹介・調査・考察・解説・報告」として両者の性格の違いを示すことで、研究目的やねらいを明確に把握できるようにする予定です。また、投稿者にとつて原稿作成の助けとなるよう「原稿チェックリスト」を設けます。その内容例としては「同内容のものを他に投稿中ではない」「本原稿の内容について、他の査読誌には未掲載のものである」「他の出版物の著作権、人権を侵害していない」とした研究倫理に関わる事項、日本語が母語でない場合に「日本語のネイティブチェックを受けている」とした使用言語に関する事項などです。これらを付すことにより、形式的なチェックに加え、論文全体を見直すことにもつながることから現在、導入に際しての詳細を取りまとめています。

上記の投稿と連動してくる原稿査読の観点や判定に関わる事柄については、特に慎重な審議が進められています。こうした審議を経て、学会誌第34号投稿に際して適用できる規定にするため、改定に関する全体像を引き続き理事会にはかり、今秋の大会で開かれる総会において改定案を報告できるよう目指しています。

『書学書道史研究』編集業務を進めるにあたっては、投稿原稿のほか大会での講演録や特集企画、学術動向に関する論考など、企画局・渉外局・振興局・広報局との連携によってはじめて形にできるものが多くあります。また実務にあたっては、会計局・事務局への打診や相談が欠かせないものとなっています。これからも編集局内はもとより、各局との連携を深められるよう努めるとともに、会員の皆さまからのご意見ご叱正をいただきながら、学会誌の更なる充実に努めてまいります。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

(編集局長)

第33回 書学書道史学会大会開催のお知らせ

企画局

今年度の書学書道史学会大会は、10月28日（土）、29日（日）の両日にわたり、文化フォーラム春日井および春日井市道風記念館において、対面方式での開催を予定しております。開催に際しては、感染症対策の徹底を図りますが、やむを得ない事情で対面方式による参加が困難な方には、事前にお申し出いただくことで、オンラインでの参加も可能とするように対応します。

詳細および参加申込については、9月下旬に「大会のしおり」として研究発表のレジュメとともにご案内を差し上げます。現時点での概要は以下のとおりです。開催方法は「大会のしおり」の発送の後にも変更する場合があります。最終的には学会HPでお知らせしますので、ご承知おきください。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。



◆理事会

10月28日（土）

11時00分～

文化フォーラム春日井・会議室

◆大会

10月28日（土）

12時00分～

受付開始

文化フォーラム春日井・視聴覚ホール

13時00分～14時00分

開会式、総会

14時00分～17時00分

研究発表（5～6本程度）

10月29日（日）

文化フォーラム春日井・視聴覚ホール

10時00分～12時00分

研究発表（3～4本程度）

12時00分～13時00分

記念撮影、昼食

13時00分～14時10分

講演「日本の書流（仮）」

14時10分～14時20分

古谷稔氏（東京国立博物館名誉館員・本学会名誉会員）

14時20分～14時30分

閉会式

14時30分～14時40分

閉会式後、道風記念館にて特別展「人と書く日本の書」の息吹」見学

◆文化フォーラム春日井へのアクセス

JR中央本線「春日井駅」下車・北口より

・徒歩20分

・名鉄バス「鳥居松」下車、西へ徒歩2分

・かすがいシティバス東北部線・東南部線「市役所」下車すぐ

（〒486-0844 愛知県春日井市鳥居松町5-44）

◆春日井市道風記念館へのアクセス

JR中央本線「勝川駅」下車

・徒歩30分

・かすがいシティバス南部線「道風記念館」下車すぐ

（〒486-0932 愛知県春日井市松河戸町5-9-3）

◆宿泊施設について

役員、会員ともに各自で手配願います。

お問い合わせ先

書学書道史学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パレスサイドビル7F（株）毎日学術フォーラム内

TEL: 03-6267-4550 FAX: 03-6267-4555

メールアドレス maf-syogaku@ynavi.jp

第33回 書学書道史学会大会研究発表者募集要項

企画局

今年度の書学書道史学会大会は、上記のとおり開催いたします。会員各位には、日頃の研究成果を意欲的かつ積極的に発表いただきたく、左記の要領で募集します。

記

- ①開催日／方法：10月28日（土）、29日（日）／対面での発表を原則としますが、オンラインによる発表に切り替わる場合があります。その場合は、それに応じたIT機器を扱っていただきますので、ご承知おきください。
- ②発表時間：各30分（発表20分、質疑応答10分）
- ③申込方法：Eメールにて、右記お問い合わせ先までお申し込みください。件名には必ず「書学書道史学会大会発表申込（※発表希望者氏名を付す）」と明記してください。また本文の冒頭に「所属・氏名・連絡先」を記したのちに、発表内容の題目および発表内容の要旨をレジュメ（800字程度）にまとめてご提出ください。
- ④レジュメ：原則として、ワープロ（テキスト形式、Wordファイル形式のいずれか）で作成し、申込時のEメールに、ファイルを添付して送信してください。
- ⑤申込締切：6月30日（金）必着
- ⑥発表者の決定と連絡：7月9日（日）開催予定の常任理事会にて協議・決定し、採否の結果は個別に連絡いたします。
- ⑦レジュメ集の公開：上記の「大会のしおり」（9月下旬配付）には、研究発表レジュメ集を添える予定です。この内容はホームページにも掲出いたします。

※注記

・大会の発表者については、学会誌『書学書道史研究』第34号への投稿申込があったものとして扱われますので、改めて学会誌への投稿申込を行う必要はありません。

新入会員紹介

事務局

・学会誌への論文投稿締切は、令和6年3月31日となっております。投稿後、原稿掲載の採否は論文査読委員会によって決定されます。採否は論文査読委員会によって決定されます。

◆一般会員

田中美恵子（東京都立竹早高等学校）
陳 世銘（台北医学大学）
樋口弓弦（鈴鹿工業高等専門学校）

◆学生会員

井上雅喜（大東文化大学大学院）
内野陽菜（筑波大学大学院）
華 樺（筑波大学大学院）
章 楚弦（大東文化大学大学院）
高橋杏奈（筑波大学大学院）
趙 素雅（筑波大学大学院）
陳 雪柯（大東文化大学大学院）
陳 雪濤（東京大学大学院）
鄭 天貽（関西大学大学院）
陶 花源（筑波大学大学院）
龐 博（大東文化大学大学院）
又場唯斗（大東文化大学大学院）
万 恬甜（大東文化大学大学院）
沐 屹奮（大東文化大学大学院）
楊 春雨（広島大学大学院）
李 瀟（兵庫教育大学大学院）

※令和4年7月～令和5年4月に申請された方

2023年度書学書道史学会例会のお知らせ

企画局

今年度の例会は、7月9日（日）午後12:00によるオンラインでライブ配信として開催します。例会への参加は無料です。プログラムは以下のとおりです。

13時30分

理事長挨拶・趣旨説明

13時35分～15時05分

研究発表

① 13時35分～14時20分

「李瑞清・曾熙に見る「鋸体」について」

佐藤汰一（AICJ中学・高等学校講師）

② 14時20分～15時05分

「新発見の廉泉「小萬柳堂書画コレクション」

—張瑞図《行書玄都壇歌寄元逸人詩》初探—

劍持翔伍（兵庫県立美術館学芸員）

15時10分～16時30分

講演

「小萬柳堂書画コレクションをめぐる廉泉と日本人の交流」

戦曉梅氏（国際日本文化研究センター教授）

◆講師紹介

戦曉梅（せんぎようばい）氏

中国吉林省長春市生まれ。総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了。国際日本文化研究センター外来研究員、東京工業大学准教授を経て現職。博士（学術）。専攻は比較文化、日中近代美術史。著に『鉄斎の陽明学』（単著、勉誠出版）、『近代中国美術の胎動』、『近代中国美術の境界』（ともに共編、勉誠出版）等多数。

◆申込方法

7月2日（日）までに、下記のURLまたは二次元コードからアクセスしていただき、必要事項を入力の上ご送信ください。例会の前日までに、参加のURLと資料等をお送りいたします。

<https://forms.office.com/r/iP2km8akhj>

皆様のご参加をお待ちしております。

2023年度書学書道史学会例会 参加
申込フォーム



① 李瑞清・曾熙に見る「鋸体」について

佐藤 汰一

中華民国初期、李瑞清（1876～1920）・曾熙（1861～1930）はともに上海へ移り、売芸活動を行った遺老である。両者は「鋸体」と称される筆画の「揺らぎ」を強調させた新奇な書風で一世を風靡し、上海芸苑を牽引した領袖としても知られる書家である。彼らにかかる先行研究は多岐にわたり、これまでに年譜・図録の刊行なども整備されてきた。しかし、両者の同一古典の臨書作例に鑑みても、それぞれの「鋸体」の表現に異なる一面があることは、十分に顧みられていない。このことは、「梅庵は喜んで鼎彝、漢中石門の諸刻、劉平国、裴岑、張遷、礼器、鄭道昭、爨龍顔の属を学び、自ら北宗と号す。季子は則ち石鼓文、夏承、華山、史晨、太傅、右軍、大令を学び、尤も鶴銘、般若を好んで、自ら南宗と号し、以つて相敵す。」（李瑞清『清道人遺集』）と、互いに両者の嗜好の相違に自覚的であったことから付会の説ではないであろう。

そこで、本発表では、李・曾両者を踏まえた「鋸体」の「揺らぎ」に着目し、両者間の「揺らぎ」の表現の差異、そしてそこから推察される両者独自の書法観を明瞭にしたい。この点を明らかにすることで、筆画の「揺らぎ」による表現効果に対し再認識が促されるところに、それを表現に取り入れ多用した近代の書法の再評価にも一石投じることができると考えるからである。

本発表の検討方法としては、まず李・曾個別の「揺らぎ」の年代的变化・傾向を示し、かつ彼らの書論（題跋を含む）と表現との関連性を整理する。そのうえで「揺らぎ」の比較検討を行い、両者に見られる表現の差異を明らかにしたい。この際、張大千や胡小石、李健など、李曾の門弟の書法や、「鋸体」に括られない「揺らぎ」を用いる童大年といった書家の作例も参考にし、「揺らぎ」の表現の実態に迫りたい。

（AICJ中学・高等学校講師）

②新発見の廉泉「小萬柳堂書画コレクション」

—張瑞図《行書玄都壇歌寄元逸人詩》初探—

劍持 翔伍

兵庫県立美術館が所蔵する「梅舒適コレクション」の中に、張瑞図（1570～1641）筆の《行書玄都壇歌寄元逸人詩》（明・天啓5年（1625）、1巻、絹本墨書、24.2×205.7cm）が伝わる。作品に備わる卷子袋や遺された多くの鑑蔵印をみると、当該作品は泰州の宮氏兄弟（本昂・玉甫）の手を経て、中国近代に詩人として活躍した廉泉（1868～1931）が旧蔵した、いわゆる「小萬柳堂書画コレクション」の1点であることが明らかとなった。

廉泉については、豊富な明清の書画を収蔵して日本に請来したことが知られ、近年では収蔵品とそれをめぐる交流（鈴木洋保、1995・1996・1999）、書簡・日記類を手掛かりとした日本における収蔵品展覧の状況（戦曉梅、2018・2022）などに対して研究が進められている。廉泉の旧蔵品に関しては、展覧した作品の目録『小萬柳堂鑑蔵書画展観総目録』（大正3年（1914））に東京美術学校で開催された「小萬柳堂鑑蔵書画展覧会」の出品リスト）や作品写真掲載する書籍（東京美術学校編纂『小萬柳堂劇蹟』（大正3年、審美書院）など）、雑誌によってもその一端は明らかになっている。さらに日本国内に現存する廉泉の旧蔵品については、東京藝術大学美術館1点、大阪市立美術館5点、関西大学内藤文庫2点、さらに東京国立博物館の844点が計上される（邱吉、2021）。ところが以上の成果を参照すると、廉泉旧蔵品の多くが絵画であり、特に彼が蔵した明清の書跡についてはいまだ具体的な作品の実像がつかみ切れていない状況にある。

以上を踏まえて本発表では、はじめにこの度新発見された当該書跡の概要を示す。この際、廉泉が自身の収蔵品を披露する「南湖扇面美術館」を建てるなど彼が神戸と密接な関係を有したことを念頭に置きつつ、当該作品の伝来も明らかにする。これに基づき、近代書画流入史に重要な位置を占める小萬柳堂書画コレクションの再評価を試み、当該作品の受容史的意義についても考察したい。

（兵庫県立美術館学芸員）

講演

小萬柳堂書画コレクションをめぐる廉泉と日本人の交流

戦 曉梅氏

小萬柳堂書画コレクションは、中国書画コレクター・詩人廉泉（1868～1931）が所有するコレクションで、そのうちの多くは現在日本に残されている。所有者廉泉は清末民国期の中国江蘇省無錫の出身で、字は恵卿、号は南湖または南湖居士、岫雲山人、小萬柳堂、世人など。上海で出版社「文明書局」の経営に携わり（1906～1921）、その間中国でいち早くコロタイプ印刷を導入したことも知られている。

大正3年（1914）4月、廉泉は東京大正博覧会に参加するために百点余の中国書画を携えて初めて来日し、4カ月ほど滞在した。その後昭和2年（1927）まで計6回日本に来ており、とくに大正8年（1919）までの5回は、毎年のように日本を訪れ、長く滞在した。小萬柳堂書画コレクションの日本における展示、図録出版、譲渡をめぐり、大村西崖、瀧精一、狩野直喜、内藤湖南などの日本の美術史や中国学の学者、また三島中洲、末松青萍などの漢詩人と深く交友関係を築いた。

本講演では、廉泉初来日の背景とその活動を概観したうえで、その日本人との交流について紹介し、これらの交流活動の書画収蔵史や美術史における意味について考えてみたい。

（国際日本文化研究センター教授）

各局報告

◆企画局

今年度の大会は、春日井市道風記念館のご厚意により、同館の特別展を見学することになりました。会員各位には、積極的にご参加いただきたく、また研究発表にも奮ってご応募ください。なお、7月の例会は、オンラインのライブ配信による初の試みとなります。こちらにも、上記の要領では非にご参加ください。

(局長 菅野智明)

◆渉外局

学会誌32号のJ-STAGE登載

令和4年10月31日刊行の『書道書道史研究』32号(2022年)を本年3月31日に独立行政法人科学技術振興機構(JST)運営のJ-STAGE(ジェイ・ステージ)で公開し、本学会のホームページにてお知らせいたしました。今号には論文8件のほか、学界展望や書評を掲載しています。どうぞご利用下さい。

日本学術会議協力学術研究団体より協力学術研究団体の実態調査アンケートが届き、局内で語りつつ回答しました。

本学会が入会している日本書道文化協会より、登録無形文化財「書道」特別揮毫会のご案内が、また東方学会より、第67回国際東方学者会議、第4回中国文化研究国際論壇のご案内が届きました。いずれも、本学会のホームページにてお知らせいたしました。

(局長 富田 淳)

◆振興局

研究促進助成金制度について

2023年度「研究促進助成金制度」による研究計画の募集を開始しました。本制度は、研究に専心できるよう諸手続を可能なかぎり簡便に設計した魅力的な研究助成制度です。ホームページに掲載されている「2023年度募集要項／研究促進助成金制度」をご参照のうえ、奮ってご応募ください。

研究促進助成金その他振興局所管業務に関するご質問やご意見がありましたら、本会報一面の(株)毎日学術フォーラム内事務局(メールアドレス: naif-syogaku@nnavi.jp、担当: 松井裕希氏)までお寄せください。

(局長 成田健太郎)

◆編集局

『書道書道史研究』第33号の編集について

◇投稿論文: 2023年3月末日締め切りの投稿論文8件のうち形式規定を満たす7件を受理し、第33号の学会誌刊行に向けて編集を開始しました。7件の論文は査読を経た後、採択論文は『書道書道史研究』第33号に掲載されます。

◇特集「西林昭一先生のご功労」(仮): 2022年7月に逝去された西林昭一先生の本学会会期への多角的な功労功績を顕彰し、今後の研究への指南とするため、編集局で特集を企画し、5氏に異なる観点から執筆(各氏のタイトルは未定)いただきます。

①「学会創設時期から理事長在任時の功労」【中村伸夫】

②日中書法学術交流【河内利治】

③事典・叢書等の書籍編纂【横田恭三】

④中国書学と書作の姿勢【澤田雅弘】

⑤書跡鑑定【小川博章】

◇講演録「祖父・清六から聞いた兄・宮沢賢治」: 盛岡大会での宮沢和樹氏による講演録をもとに、広報局にて取りまとめた原稿を掲載します。

◇「学界展望」: 2021年度〜2022年度にわたる日本領域の研究成果に関する論考を山口恭子氏に寄稿いただく予定です。

◇「書評」もしくは「新刊紹介」: 本誌で取り上げべき書籍の推薦を随時(第33号掲載分については、2023年5月中)受け付けております。複数の著作候補が届いた場合には、編集局で対象本を検討して決定いたします。

『投稿規定』「執筆要領」の改定について

巻頭でお知らせしておりますように、現在、「投稿規定」「執筆要領」の見直しを行っています。「論文」「研究ノート」をはじめとする原稿の性格、投稿前の原稿チェックリストなどについて、第34号投稿時の適用を目指して理事会において審議を重ねています。改定された内容については、本学会ホームページで公開いたします。投稿の際には、ホームページ記載の「投稿規定・執筆要領」および「別紙様式」最新版をご確認のうえ、様式に沿った原稿作成をお願いいたします。

皆さまからの積極的な投稿をお待ちしております。

(局長 萱のり子)

◆会計局

年会費についてのお願い

本号に年会費納入用の郵便振替用紙を同封しています。年会費は、6月30日までに納入ください。なお、令和5年3月現在、会費を滞納している方には、本年度分に滞納年度分を加算した金額が記載されており、速やかに全額を納入ください。

また、3年以上滞納の方は、すでに導入されている「長期会費滞納者の自動退会（除籍）制」の適用対象となります。ただし、退会（除籍）適用対象者となった場合であっても、退会届提出の年度分までの合算額における学会費の請求権は消滅しません。本件に関して、会員台帳別表にて管理の上、適宜納入請求を続けることが総会にて決定されていますので、予めご了承ください。

なお、海外在住の会員の方は、クレジットカードによる年会費の納入が可能です。クレジットカード決済を希望される方は、振興局所掲の事務局までご連絡ください。

（局長 増田知之）

◆事務局

修了などにより学籍を離れた方へ

本学会では、学生会員の「有期会員制」を導入しています。「会員変更申込書」の提出により一般会員資格の付与などが行われますので、今春に学籍を離れた方は必ずご提出ください。「会員変更申込書」は、学会ホームページからダウンロードできます。

なお、「会員変更申込書」下の「紹介会員氏名」「役員推薦氏名」「理事会承認」各欄の記入は不要です。書類送付やお問い合わせは、振興局所掲の事務局までお願いします。

会員名簿発行に伴う情報提供のお願い

本年度に会員名簿を発行する予定です。ご住所・ご所属・会員種別等の変更や修正がございましたら、振興局所掲の事務局までご連絡くださるようお願い申し上げます。また、転居や所属の変更があった会員をご存じの場合は、本人に確認の上、事務局までお知らせいただけましたら幸いです。

令和5年度事業・活動計画（案）

本来ならば総会で承認を得るべきものですが、現段階での予定としてここに告示いたします。変更等の可能性もありますので、ご留意ください。

4月9日 第1回常任理事会（オンライン会議）
4月23日 第1回理事会（オンライン会議）
5月15日 第45号《会報》発行及び発送
6月1日 「研究促進助成金制度」申請受付（～7日）
6月30日 第33回大会発表申込締切
7月上旬 令和4年度決算会計監査
7月9日 第2回常任理事会（オンライン会議）
8月下旬 第2回理事会（メール会議）
9月下旬 《大会最終案内》《大会レジュメ集》発行及び発送
10月28日 第3回理事会（定例）（於文化フォーラム春日井）
令和5年度総会（於文化フォーラム春日井）
第33回大会1日目（於文化フォーラム春日井）
第33回大会2日目（於文化フォーラム春日井）
10月29日 第33号『書学書道史研究』発行及び発送
10月31日 第4回理事会（メール会議）
12月下旬 第34号『書学書道史研究』投稿申込締切
12月31日 第46号《会報》発行及び発送
1月15日 第17期名簿・第18期役員選挙投票通知発送
2月上旬 第18期役員選挙投票締切
2月下旬 2024年度例会発表申込締切
2月29日 選挙選出理事による緊急懇談会
3月3日 第17期・第18期新旧役員合同理事会（オンライン会議）
3月17日 第34号『書学書道史研究』投稿原稿締切
3月31日

（局長 尾川明穂）

事務局（株毎日学術フォーラム内）への電話でのお問い合わせにつきましては、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための一部テレワーク実施に伴い、後日のご連絡となる場合がございます。

ご迷惑をおかけいたしますが、何卒ご理解くださいますよう、お願い申し上げます。

談話室

ルイ・アラゴンの墓参り

中津 雅美

1950年代に、ルイ・アラゴン（1897～1992）の詩を題材に前衛的な書作品を制作した大澤雅休（1890～1953）・竹胎（1902～1955）兄弟が居た。第二次大戦直後の書道界は、新旧の表現が入り交じり混沌としていた。そんな折、1951年に雅休はアラゴンの詩に出会い、鑑われた現実から自由な世界への展開を希求して「鑑戸」（群馬県立近代美術館蔵・佐久市立天来記念館蔵）を制作した。4年後、弟の竹胎も「アラゴン平和の歌」（五島美術館蔵）を制作した。

私は今年の5月、伯父と父（竹胎）の作品の写真を携えて、アラゴン記念館を訪れる予定である。アラゴン氏は、お墓の中で喜んでくれるだろうか。

韓国の小学校における書芸教育の実践

野田 悟

東京学芸大学の草津先生のご案内にて、3月23日（木）午後3時より、オン

ラインによる「日中韓書教育フォーラム2023」に参加させて頂きました。本年度は昨年度の中国の小学校書法教育に引き続き、韓国の小学校の書芸の授業の録画を拝見しました。今回の2校のいずれの児童も心から楽しく筆を持つてハングルを書く様子がとても印象に残りました。その中でも「中鋒」や「逆筆」等専門用語を使用されている部分、国語の教育のみに重きを置かれている日本の「書写教育」とは違い、書における視点の多様性も感じられ、また線の芸術性も細かく指摘していました。

中国書法とも比較して、書の歴史を小学校から学ぶ所からも、日本とは大きな隔たりを覚えてしまいます。

風景画に点景を描く意味

春田 賢次朗

今年は中村不折の没後80年にあたります。勤務先の台東区立書道博物館では、5月2日（火）～8月27日（日）の間、フランス留学までの修業時代に焦点を当てた企画展（前期）を開催いたします。

洋画研究のために上京した不折は、小山正太郎の私画塾（ふどうしや）同舎の生徒が展覧会に出品する風景画の多くは、小山によって点景が加えられたようです。小山が点景を重視したのは、

風景がただの風景では面白くなく、生活のある現象を織り込むためでもありました。

普段芸術に接することの少ない鑑賞者にとって、自身の営みとの距離があまりに大きいと無関心や拒絶を引き起こしかねません。これを回避して、どのように好奇心をくすぐるか。これからの課題です。

若者のソーシャルメディアでの字体学習

李 松華

3月中旬に一時帰国した際、姪の宿題ノートで丸い字体を見つけ、ソーシャルメディアから学んだことを知った。若者は気軽にさまざまな字体に触れ、日常に取り入れている。デジタル筆記デバイスが普及し、書道創作の形態も変化しているが、唐紙や和紙に書かれた文字の質感を伝えることは難しい。

一方、先端技術の発展が書道にもたらすものにも注目すべきである。ソーシャルメディアによって多くの人が書道に触れ、伝統文化への興味を喚起することで、書道の普及に広いプラットフォームを提供している。ソーシャルメディアにおける書道の伝統的精神と価値観を保持する方法の模索は、すでにはじまっている。

編集後記

◆昔の職場の伝手で榎本武揚の書について調べています。調べてみると、印刷物を模倣して作られたもの、明らかに本人とは異なる「現代」的書法で認められたものなど、多様な贋作が存在していることがわかってきました。（高橋佑太）

◆五島美術館に入り早3年半が経ちました。今秋は当館収蔵の国宝《源氏物語絵巻 夕霧》も出陳される「やまと絵」受け継がれる王朝の美」（東京国立博物館、さらには「北宋書画精華」（根津美術館 など、都内で日本書道史・中国書法史に関わる超大型の特別展が予定されており、楽しみでなりません。（佐々木佑記）

◆母校の恩師から新学期に向けて部活のユニフォームを新調するにあたり、その文字を揮毫してほしいとの連絡を受け書かせて頂きました。拙い文字で恥ずかしい感情はありつつも、私の書いた字で恩師が喜んでる姿を見ることが出来、幸せな気持ちになりました。（村田 萌）

◆このところ、書家の先生方に話を伺う機会が多い。古典、文房具、書論、社会情勢作家を取り巻くすべてをない交ぜにして書が生まれていることがよくわかる。やはり作家の話は面白い。（高橋利郎）